

平成10年度 Block 6

課題 No. 7

「帰国後の発熱」

無断で複写・複製・転載すると著作権侵害となることがありますのでご注意ください。



## 帰国後の発熱

シート 1

国枝熱夫さんは、39歳の商社員です。今回、森林開発調査の為、タイ・ミャンマー国境の町に出張することになりました。「最近、世界で様々な感染症が再び増加している。」という新聞記事を目にしたこともあり、姪の医学生B子さんに健康上の注意点を相談してみました。

1998-B6-T-7

## 帰国後の発熱

シート2

出張は1カ月半に及び、1週間前に帰国したところ、昨夜発熱がありました。現地滞在中にも同様の発熱があり、心配になり会社の健康管理室を受診しました。

1998-B6-T-7

## 帰国後の発熱

シート 3

実は、国枝さんは、医師の勧めで現地滞在中は chloroquine 300 mg 毎週一回の予防内服を続けていました。最初の発熱はタイ・ミャンマー国境の町滞在 25 日目で、当日は朝より頭痛、筋肉痛、全身倦怠感等の症状を自覚していましたが、夕方より体温の上昇をきたし、熱帯地にもかかわらず毛布にくるまっても抑えきれない程の寒気がありました。高熱は夜半過ぎには多量の発汗を伴い解熱しました。その時点で自分自身の判断で、手持ちの Fansidar 3錠を内服しました。その後 2 日目にも軽度の体温上昇をきたしましたが、1 週間目までに全身倦怠感等の症状も軽快し、その後は順調に経過し、帰国となりました。帰国後 7 日目に初回と同様の症状を伴う発熱が再び出現。健康管理室受診となりました。受診時、体温 38.5℃。理学的所見として左肋骨弓下脾臓を 2 横指触知し、軽度の貧血を認めました。

1998-B6-T-7

## 帰国後の発熱

シート 4

診断確定後、mefloquine 750 mg 一回経口投与により治療を行ったところ、症状は2日目までに軽快し、その後45日間経過観察が行われましたが、症状が再燃することはありませんでした。

それから半年が過ぎ、国枝さんは再び南太平洋のソロモン諸島に出張することになりました。今度は真剣にマラリア予防に関する助言を医師から受けていこうと思っています。

1998-B6-T-7